

患者さん先生！

いつものように、「おはよう！気分はどうか？」と声を掛けながら病室に入って行く。「お父さんは笑うと前歯が出てビーバーのようだ」と子どもに言われているので、気を付けながらも笑顔を絶やさないように心掛けている。

「先生の笑顔ってとてもかわいいですね」と言われると、お世辞と分かっているけど気分は悪くない。ますます目じりを下げて笑顔になる。しかし、そんなことで喜んでいるとすぐに心の中を見透かされてしまう。経過の長い患者さんは、ちゃんと自分の状態を医師や看護婦以上に分かっている。顔色ひとつで、自分に対して今どんな事をしようとしているのか予想できているのである。

「今日の先生の笑顔はいつもと違う！なにかあるんでしょう。今度はどんな治療ですか？私にはあの治療はどうも合わないようで……。前にしてもらった治療のほうが……。」「先生！そろそろ白血球が減ってくると思います。調べて下さい。『うがい薬』を出してくれませんか」といった調子で、治療に対して牽制（けんせい）したり希望を出したりしてくる。そんな時にはこちらも負けてはいられないので「〇〇教授(患者さんの名前)の言うとおりで。〇〇さんには医者には要らないようですね」と切り返すと、ニヤッと苦笑いしながらも真剣に自分の主張を押し付けてくる。長く入院されている患者さんの場合、こんなやり取りが治療に必要なことにもなる。私達にとって素直な患者さん先生のことが多い。

これが外来患者さんの場合には少々厄介になってくる。お互いに理解できていない状態にあるのに、自分の病状を<〇〇>と決め込んで診察に来られる場合である。特に患者さんのこれからの人生に重大な影響を及ぼす病状があり、手術や入院治療が必要な場合、「私の体は、私が一番良く分かっています。東京に行くと、『〇〇療法』というのがあって、〇〇さんがそれが良いというので結構です。私は手術が嫌いですから……。」「と、心配で診察に来ながら自分の言いたいことだけを言って耳を貸さない。つい声も大きくなり、あらわになってくる。最終的には納得することが多いのだが、何回説得しても駄目なケースもある。特に同じような病状の患者さんから「手術なんかしても治らない。(どこどこに) 〇〇先生がいるから行ってみなさい。食事療法だけで治るから……。」「等と聞かされていたりすると本当に厄介であることが多い。今、手術をすれば完全に治ると分かっている患者さんの場合には、“自業自得”だと割り切ることもできず、あらゆる手を尽くすことになる。それでも聞き入れない患者さんもおり、誰がそうしたとは言わないが、やり切れない気持ちになる。

しかし、患者さん先生は色々な事を教えてくれ、貴重な存在のことが多い。寝たきりの生活が続いているSさんもその一人である。

「先生、手を握って！今日の先生の手は冷たくて気持ちがいい」と言って、痛みを耐えながらも笑顔で手を握ってくる。その目を見ると、何を言いたいのか痛いほど分かるだけに、黙って笑顔で握り返す。そんな時、「自分の笑顔はどんな笑顔として患者さん先生には映っているのだろうか」と考えてしまう。